

## 【介護予防・日常生活圏域ニーズ調査】

※「長岡第四小学校区（三中）」は、阪急より東側、「長岡第四小学校区（四中）」は、阪急より西側の地域

## 1. 調査対象者の基本属性等

回答者の内訳として、前期高齢者（65～74 歳）より後期高齢者（75 歳以上）が多くなったことから、高齢化が進んでいることがわかります。その影響で、要介護 1 以上の認定はないものの何らかの介護を要する人が増えています。

≪クロス集計≫

- ・家族構成について、「一人暮らし」の割合が多い校区は、「神足小学校区」、「長岡第六小学校区」、「長岡第四小学校区（三中）」。「夫婦 2 人暮らし」の割合が多い校区は、「長岡第四小学校区（四中）」、「長岡第五小学校区」、「長岡第三小学校区」。

## 2. からだを動かすことについて

回答者の年齢が上昇していることから、過去 1 年間の転倒経験者は約 33%に上り、前回調査から増加傾向にあります。特に 85 歳以上では半数近くが転倒を経験し、強い不安を抱えています。基本的な日常生活動作における虚弱がうかがえ、足腰などの痛みなど身体的機能の低下が社会参加の機会を控えている大きな要因になっていることがわかります。また、外出の頻度が高いほど幸福感が高いという、相関関係がみられます。

さらに、外出を控えている人の半数が閉じこもりのリスクを抱えていること、外出にかかる物理的な壁は多様であること、移動手段が複数ある場合は閉じこもりのリスクが低いことがいえます。

≪クロス集計≫

- ・外出を控える要因の一つである「交通の便がない（15.2%）」は、校區別では、「長岡第十小学校区」、「長岡第三小学校区」、「長法寺小学校区」で割合が高い。

## 3. 食えることについて

一人暮らしの人で誰かと食事をする人が毎日、週に何度か、月に何度か、ある人の計は 56.1%であり、一人暮らしでない人と比べて低いことから、一人暮らしにおける孤食リスクの深刻さが浮き彫りになりました。他者との共食機会の欠如が、将来的なオーラルフレイルや低栄養を引き起こすリスクとして強く懸念されます。

## 4. 毎日の生活について

回答者の年齢が上昇していることから、手段的な日常生活動作においても虚弱がうかがえ、特に物忘れを自覚している人が約 4 割に上ります。

## 【長岡京市 総括】

また、5年後の生活を見据えた際、「買い物（37.0%）」「調理（30.4%）」に不安を抱く人が多く、特に85歳以上では「買い物への不安」のある人が過半数です。地域性もありますが、在宅生活を継続するために、介護保険外での「移送サービス（介護タクシー等）」や「買い物支援」などを始めとする、幅広い支援が求められています。

一方で、趣味や生きがいのある人は幸福感が高いという、相関関係がみられます。

### 5. 地域での活動について / 8. ボランティア活動について

回答者の年齢が上昇していることから、前回調査と比べて地域活動への不参加が全項目で増加、いずれの活動にも参加していない人は37.8%に上ります。

ただし、参加している人は幸福感が高いという明確な相関関係がみられることから、高齢期の心理的健康を保つためには、何らかの「社会的役割（出番）」を提供し続ける仕組みづくりが極めて有効であるといえます。

さらに、ご近所の人との関係づくりに自発的な姿勢の人は、認知機能の低下リスクが非該当の割合が高くなっています。

《クロス集計》

- ・全体で地域活動に「参加したい」又は「参加してもよい」の割合が50%を超えていますが、その中で「高齢者、子どもの支援」や「調理、ゴミ出し、屋内外の清掃などの日常生活の支援」に関心が高い状況です。

### 6. 就労について

現在も就労している人が26.9%ですが、前期高齢者（65～74歳）では約4割、後期高齢者（75歳以上）では約2割へと急減していることから、社会との関わり方に大きな転換期があることがわかります。また、収入のある仕事をしている人はしていない人に比べて、認知機能の低下リスクに該当しない人の割合が高くなっています。

75歳という年齢が就労を通じた社会参加のひとつの壁となっており、この時期に就労から、地域のボランティア活動や趣味のグループへスムーズに移行できるような支援策が求められます。

### 7. たすけあいについて

日常の相談相手や看病の担い手は「配偶者」に強く依存しています。しかし、85歳以上になると配偶者に頼れる割合が減少し、「別居の子ども」や「地域包括支援センター」の存在感が増してきます。ご近所付き合いは「あいさつをする程度（71.8%）」が主流ですが、「困ったときにも助け合える人はいない」は前回より3ポイント減少しています。

また、助けあえる人がいる人はいない人より幸福度が高いという、相関関係がみられます。

## 【長岡京市 総括】

### 9. 健康について / 10. 認知症について

介護予防の重要性は8割以上の方が認識しています。しかし、市の介護予防拠点である「健幸すぽっと のびのび苑」の利用状況を小学校区別に見ると、明確な地域差が存在します。施設に近い地域では利用が定着している一方、距離のある地域では利用率が低く、「利用する予定はない」との回答も比較的高くなっています。施設の知名度の向上、ニーズに即したプログラム等の実施、交通アクセスの利便性向上とともに、地域に出向く形や他の地域資源の活用など、多様な介護予防事業の展開が必要であることがわかります。

また、認知症の相談窓口の認知度は、地域包括支援センターの認知度の上昇とともに前回より12ポイント上昇したものの、全体として依然3割程度にとどまっています。そのうち、支援を要する人の6割弱、現段階では支援を要しない人の3割に情報が届いていますが、啓発活動の継続が必要です。

《クロス集計》

- ・「健幸すぽっと のびのび苑」について、校区別の利用状況は、「長岡第七小学校区（25.9%）」、「長岡第三小学校区（24.0%）」、「長岡第十小学校区（17.1%）」と北部校区の利用率が高く、逆に南部校区の「長岡第九小学校区（5.7%）」、「長岡第四小学校区（三中）（6.3%）」の利用率は低くなっています。
- ・自分が住んでいる地域を担当している地域包括支援センターの認知度について、「知っている」割合が高いのは、「長岡第四小学校区（三中）」、「長法寺小学校区」、「神足小学校区」となっています。逆に、「知らない」割合が高いのは、「長岡第十小学校区」、「長岡第七小学校区」、「長岡第八小学校区」となっています。

### 11. 住まいについて / 12. 権利や尊厳について

介護が必要になった際の住まいについては、西側の山手エリアにおいて特性が目立ちます。同エリアでは「今の家をリフォームしてできる限り住み続けたい」との回答が多く、かつ「まだ具体的に考えていない」との回答が少ない傾向にあることから、住み慣れた家や地域での生活を考えている人の多い地域といえます。また、介護が必要になった場合の住まいについて、80歳を超えるとその率は下がってくるものの、約半数が「まだ具体的に考えていない」という状況にあります。

また、判断能力が十分でない人への支援となる「成年後見制度」については、しくみを「知っている」人が約3割にとどまり、権利擁護に向けた理解促進の余地が大きく残されています。

《クロス集計》

- ・住まいについて、「民間住宅等への住み替え」を考えている人の割合が高い校区は、「長岡第六小学校区（19.9%）」、「長岡第四小学校区（三中）（16.7%）」、「長岡第五小学校区（15.2%）」となっていますが、これらの該当校区は、「1. 家族構

## 【長岡京市 総括】

成」の「一人暮らし」及び「夫婦２人暮らし」世帯の割合が高い校区となっています。

### 13. 介護保険制度のあり方について

今後の制度維持について、全体では約６割が「現状の水準を維持すべき」と回答していますが、現在の介護状況別に見ると、市民の意識に隠れた分断が見られます。「現在介護を受けている層」は現状維持を望む声が強い一方で、「何らかの介護・介助は必要だが、現在は受けていない層」においては、「サービスを縮小してでも保険料等の負担を抑えるべき」という回答が全体平均の約２倍に跳ね上がります。これは、「保険料負担は重いのに、自分はサービスの恩恵を受けられていない」という不満の表れと推測され、必要な人がためらわずにサービスへ繋がるための相談体制の強化や、丁寧な制度説明が求められます。

## 【長岡京市 総括】

### 【長岡京市在宅介護実態調査】

#### A 票・B 票（全体について）

A 票の回答者（在宅で要支援・要介護認定を受けている 604 人）と B 票の回答者（主な介護者のいる 382 人、63%）の差により、主な介護者のいない人は 222 人（37%）となりました。主な介護者との同居・別居の率は、同居が 41%、市内別居が 9%、市外別居が 10%でした。

市外別居している介護者は、同居や市内別居の介護者と比べ、「見守り・声かけ」が今後の在宅生活の継続に必要とする割合が高くなっています。

同居や市内別居の介護者は、市外別居している介護者と比べ、「孤立やストレスを感じている」割合が高くなっています。さらに、同居の介護者の 18%は、孤立やストレスの対処法がないと回答しています。市に対しては、介護保険外ホームヘルプ等の利用料助成といった、日々の介護にかかる経済的・心身の負担を直接的に軽減する支援策が最も強く要望されています。

#### A 票（介護を受けている調査対象者について）

在宅で介護を受けている世帯において、「夫婦のみ世帯（39.1%）」が前回より増加しており、いわゆる「老老介護」の進行が確認できます。抱えている主な傷病は「認知症（23.7%）」が最多です。約 7 割の人が施設への入所を検討しておらず、住み慣れた自宅での生活継続を望んでいますが、それを実現するためには「移送サービス（31.3%）」や「配食（22.8%）」、「外出同行（21.2%）」といった、医療・介護行為以外の「生活インフラ的支援」へのニーズが高くなっています。

#### B 票（主な介護者について）

介護者の中心は 50 代・60 代の働き盛り世代です。介護者の約半数は無職ですが、フルタイムやパートで「働きながら介護を担う」層も 4 割を超えており、仕事と介護の両立（ビジネスケアラーへの支援）が喫緊の課題です。介護者が日々不安に感じていることは「外出の付き添い・送迎」「入浴・洗身」「認知症状への対応」が高くなっています。

## 【長岡京市 総括】

### 【長岡京市ケアマネジャー等アンケート調査】

#### ■1～3. ケアマネジャー業務全般と直面する課題

地域の介護を最前線で支えるケアマネジャーの多くは、自身の業務にやりがいを感じています。しかし、「なり手が少ない・離職が多い」背景として、「給与・待遇が見合っていない（82.9%）」「精神的な負担・ストレスが大きい（80.3%）」という厳しい声が多数挙がっています。

特に深刻なのは、本来の業務範囲外とされる「介護保険外の各種手続き（64.5%）」や「救急車同乗・通院送迎（51.3%）」といった対応が常態化している点です。身寄りのない高齢者が増加する中、ケアマネジャー個人の献身に依存する支援には限界が来ており、ICT活用による事務負担の軽減とともに、行政や地域包括支援センターによる「困難ケースへの介入体制の強化」が切実に求められています。

しかしながら、居宅介護支援事業所よりも地域包括支援センターに所属する人の方が業務の負担感が大きく、今後もケアマネジャーとして働きたいかについてネガティブな回答が目立ち、やりがいも感じにくい状況となっていることが大きな課題です。

#### ■4～5. サービスの状況と高齢者の権利擁護

地域で不足しているサービスとして、「定期巡回・随時対応型訪問介護看護（40.8%）」など、重度化しても在宅生活を支えるための柔軟なサービスインフラの不足が指摘されています。また、今後の生活支援として、ここでも「外出同行（73.7%）」「ゴミ出し（57.9%）」「移送サービス（52.6%）」の充実が必要であると認識されており、高齢者本人・家族・専門職のすべての視点において「移動支援・家事支援」が共通の最重要課題となっています。

さらに、「担当利用者のうち近い将来、成年後見制度等が必要になる人がいる」との回答は約6割で、認知症の進行や独居化を見据えた権利擁護体制の整備は待ったなしの状況と言えます。

## 【長岡京市 総括】

以下は、未定稿（R 8. 7 部会では用いない）

### 【中学校区圏域別】

#### 1. 長岡中学校区

- **圏域の性格・特徴：** 市内全域で「一人暮らし世帯」の割合が最も高い（19.7%）という孤立リスクを抱えています。しかしその反面、地域包括支援センターの認知度が最も高く、地域づくり活動への「参加者としての参加意欲（53.9%）」もトップです。つまり、「独居の不安はあるが、社会とつながる意欲や情報感度は高い」という非常にポジティブな性格を持っています。
- **今後のアプローチ提言：** この地域では、住民の「参加したい」という強い意欲を受け止める器（通いの場、サロン、健康教室など）をさらに増やすことが最大の孤立防止策・介護予防になります。既存のネットワークが機能しやすい土壌があるため、単身世帯を地域で見守る「互助」のモデルケースとして育成しやすいエリアです。

#### 2. 長岡第二中学校区

- **圏域の性格・特徴：** 5年後の生活不安として「買い物」を挙げる人が突出して多く、日常生活のインフラ維持に強い危機感を抱いています。最大の課題は、地域包括支援センターを「知らない」人が過半数（53.5%）を占める点です。支援を必要としているにもかかわらず、自ら窓口に SOS を出しにくい「支援が届きにくい・孤立しやすい」性格が見受けられます。
- **今後のアプローチ提言：** このエリアでは、行政や専門職が施設で「待つ」姿勢ではなく、地域へ「出向く（アウトリーチ）」施策への重点投資が必要です。移動販売車の誘致や買い物支援ボランティアの充実を図るとともに、民生委員と連携した個別訪問や出張型相談会など、直接的なアプローチが不可欠です。

#### 3. 長岡第三中学校区

- **圏域の性格・特徴：** 「今の家をリフォームしてできる限り住み続けたい（35.5%）」という持ち家志向と地域への愛着（定住志向）が飛び抜けて強いエリアです。一方、【長岡第三中学校区】は市の予防拠点「のびのび苑」の利用率が最も高く、物理的な拠点の活用が日常に根付いています。
- **今後のアプローチ提言：** 長法寺エリアに対しては、施設整備よりも「住宅改修への手厚い補助」や「在宅を支える訪問系サービス」の拡充が住民ニーズに直結します。また、長岡第三エリアで見られる拠点活用の成功例を分析し、施設から遠いエリアの交通アクセスの改善（送迎支援やコミュニティバスの最適化）に繋げることが必要です。

## 【長岡京市 総括】

### 4. 長岡第四中学校区

- **圏域の性格・特徴：** 経済的な生活基盤が比較的安定しており、特筆すべきは地域活動に対する「企画・運営（お世話役）としての参加意欲（36.8%）」が他圏域を圧倒して高い点です。単に参加するだけでなく「自ら地域を引っ張っていきたい」という**自律性・リーダーシップに溢れた人材の宝庫**と言える性格を持っています。
- **今後のアプローチ提言：** 行政がサービスを提供する「公助」ではなく、住民自身が主体となって支え合い組織を立ち上げる「互助」のバイオニアとして最適なエリアです。市民主体のボランティア組織の立ち上げ支援や、新しい地域活動のモデル事業を展開する際の「トップランナー」として位置づけ、そのノウハウを他地域へ波及させる戦略が効果的です。